

百年前、新聞でたどるスペイン風邪流行と大阪

2020.8.30 石原 佳子

1、スペイン風邪の記憶から地域史へ

- ・語り継がれた記憶
- ・「村のスペイン風邪」執筆から(『新修門真市史』第6巻)

2、内務省衛生局編『流行性感冒』死者数について(1922年、復刻・2008年平凡社)

- ・患者数約2,380余万人・死亡者約38万8千余人(序文・巻末表)
- ・流行期(1918.初発から1920.7まで)22か月のうち数値が掲載されていない空欄が多い、なかでも大阪は15か月半が空欄である 死者総計を2万2005人とするが、それでは実態と違いすぎる

3、超過死亡数を試算する

- ・世界保健機関(WHO)：超過死亡(excess death, excess mortality)
「インフルエンザの流行によってもたらされた死亡の不測の増加を、インフルエンザの【社会的インパクト】の指標とする手法」(国立感染症研究所感染症情報センター
<http://idsc.nih.gov/disease/influenza/inf-rpd/00abst.html>)
- ・速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』の試算(2006年・藤原書店)
対象にしたのは『日本帝国死因統計』中分類：流行性感冒・肺結核・急性気管支炎・慢性気管支炎・肺炎及気管支炎・爾余の呼吸器の疾患、不明の診断、原因不詳の死亡の8項目の合計
流行期を前流行(1918.10-19.5)と後流行(19.12-20.5)に分け、それぞれの流行前(1916.10-17.5、1916.10-18.5)との差を、算出した。これによる日本国内総死亡数は、前流行26万647人、後流行18万6673人、合算45万3152人とある(計算上は447,320)
- ・今回は、総死亡数(全原因)について流行前と流行期との差を、通期と前・後期2期の両方で算出

4、統計の問題

- ・『日本帝国死因統計』(以下、帝国死因)=大阪府・大阪市月別・職業別
- ・『大阪府統計書』と『大阪市統計書』=市郡別、生産と死産
- ・現住人口と国勢調査結果、出入人口、職業別人口

5、新聞紙面と統計から流行をたどる

- ・前流行と後流行
- ・それぞれの被害
- ・流行の谷間と伝染病
- ・どの地域で、どういう人々を襲ったのか

6、地域史の中で考える

- ・米騒動と大阪市の社会政策
- ・施療としての保健医療
- ・上下水道問題
- ・市内四区・西成郡・東成郡・泉南郡
- ・職業と家族と地域

[会報連載の修正]

- ・会報6月号連載(1)3頁・表2・5行目4列：2,832,718→2,877,718。 同前表2・注記2行目：「一部数値は…」(以下、削除)。
- ・会報7月号連載(2)・本文4頁後13行：989人→983人。同後2行目：15.4倍→2058倍。5頁・表4・法定伝染病の上段：213→241,125→255。同後2行目：3.3倍→18.8倍。
- ・会報8月号・連載(3)5頁23行目：「岸和田高等学校和漢書図書室蔵」→「岸和田高等学校蔵」。5頁25行目・8頁18行目：「岸和田小学校母の会」→「岸和田母の会」。5頁後1行目：「19年から」→「18年から」。6頁後2行目：「22日の死亡213人」→「17日の218人」。6頁後1-2行目：郡部が「20日の患者11,597人と22日の死亡316人」→「26日の患者14,991人と死亡919人」。